
 学 会 記 事

第 243 回新潟循環器談話会

日 時 平成 17 年 7 月 9 日 (土)
午後 3 時～

会 場 ホテルイタリア軒 3 階
サンマルコ

一 般 演 題

1 心血管危険因子の集積における特徴

小田 栄司・大原 一彦・阿部 道行
遠藤 禎郎・原 勝人・阿部 昌洋
県立吉田病院内科

ドック受診者のうち、TG < 400mg/dL の男性 223 人と女性 204 人で、年齢、body mass index (BMI)、収縮期血圧 (SBP)、拡張期血圧 (DBP)、LDL コレステロール (LDLc, Friedewald の式で計算)、HDL コレステロール (HDLc)、中性脂肪 (TG)、空腹時血糖 (FBS)、rankCRP (CRP の順位変換)、尿酸 (UA)、の間の相関関係を解析した。男女とも、HDLc 以外の危険因子の間に有意な正の相関を、HDLc と他の危険因子との間に有意な負の相関を認める傾向が見られたが、女性における相関関係は男性における相関関係よりも有意に強い傾向が見られた。メタボリック症候群の診断基準に含まれる危険因子 (BMI, SBP, DBP, TG, HDLc, FBS) が特に強い集積を示す現象は認められなかったが、肥満関連危険因子 (BMI, TG, HDLc, UA, rankCRP) の間には特に強い相関が見られた。CRP と最も強い関係を示した危険因子は BMI であり、重回帰では、SBP, DBP, および FBS は CRP との間に有意な関係を示さなかった。また、FBS \geq 126 の男性 (n = 20) では、FBS と HDLc, FBS と UA, 年齢と UA, 年齢と TG, の間

に正負の符号が逆転した有意な相関が見られた。

2 Bucolome 併用 warfarin 投与法 II 薬物相互作用による維持量変動

その二 tolbutamide, jyosamycin, doxycycline, rocornal および dihydropyridine 系 Ca 拮抗剤

真島 正

済生会新潟病院内科

probucol の誘導効果の発現はゆるやかで、W 維持量は数ヶ月単位で漸増し、また今回発表の薬物相互作用のため見逃されてきたが、中止して pravastatin に切り換えて初めて probucol 効果消失を確かめることができた。

I tolbutamide の開始と中止時期を棒グラフで示し、中止は内容を空白とした。W 週投与量 (維持量) は折れ線で示し、Y 軸は mg/week, X 軸は probucol 開始および中止以後の月数 (年数) である。

tolbutamide の誘導効果は明らかだった。

II jyosamycin はその代謝物 (ニトロソアルカン) が肝の薬物代謝酵素 P450 の CYP3A4 と結合し、複合体を形成して warfarin 代謝を阻害する。

probucol 投与時でも jyosamycin 0.8-1.2g/day の長期投与により、中止後も長期にわたり阻害効果を示した。

III doxycycline の阻害作用はより強力で、中止後の作用期間もより永かった。そのメカニズムは不明だが、tetracycline でカルシウムイオンとキレート結合し、血漿プロトロンビン活性を抑制すると考えられているが？

IV rocornal は誘導効果を示す。

V dihydropyridine 系 Ca 拮抗剤の probucol との拮抗作用を認めたが、その効果発現までの期間が永く、また長期にわたる中止もむつかしく、その実態およびメカニズムについては結論をひかえる。